

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 8 月 18 日 8:55AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 49,500～70,000 円
(TOPIX) 3400～4250

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 45,000～54,750 ドル
(S&P500) 6300～7800

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500～30,800
(ナスダック総合) 20,700～27,200

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000～162.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 98.000～102.720

エリオット波動とは

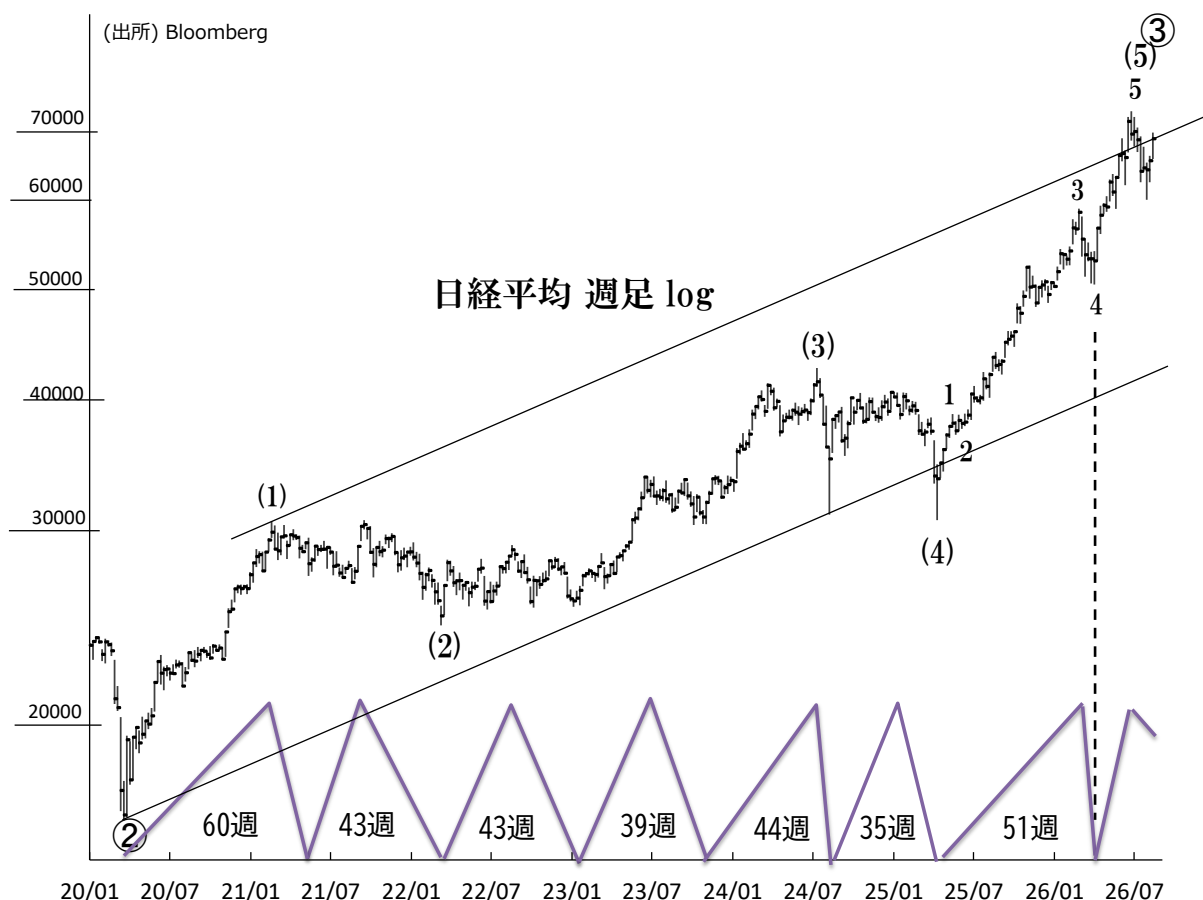
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は 5 つの上昇波と 3 つの下降波（合計 8 つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

72,831 円(6/22)はプライマリー第③波の天井であり、そこからプライマリー第④波の弱気相場が進行中とみられます。

3 月末(50,558 円)以来の現行週次サイクルは、弱気相場に特有の「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になる公算が大きい(つまり上昇期間よりも下げ期間が長くなります)。今サイクルの上昇期間はフィボナッチ 13 週(両端入れ)の長さでした。サイクル全体が 37 週～53 週(※1)ということから、6 月 22 日(サイクルトップ)からの通算下げ期間は、24 週～40 週(5 カ月～8 カ月)と推定されます。

換言すると、日経平均は今年 11 月～来年 3 月まで下値模索の展開が続くと予想されます。7 月 29 日に一時 60,448 円まで下げ、高値からの下げ率は 17%に広がりました。これは 25 年 4 月以降で最大の調整です(※2)

通常「レフト・トランスレーション」のパターンは、サイクル終点安値はサイクル始点安値を下回ります。つまり、少なくとも 50,558 円を下回らないことには現行サイクルは終わらないでしょう。

(※1)週次サイクル期間(2020 年以降の補正後)は 45 週±8 週(37 週～53 週)。

(※2)サイクルの高値から安値まで、下げ率は 10%～26%(平均 17%)。



[TOPIX]

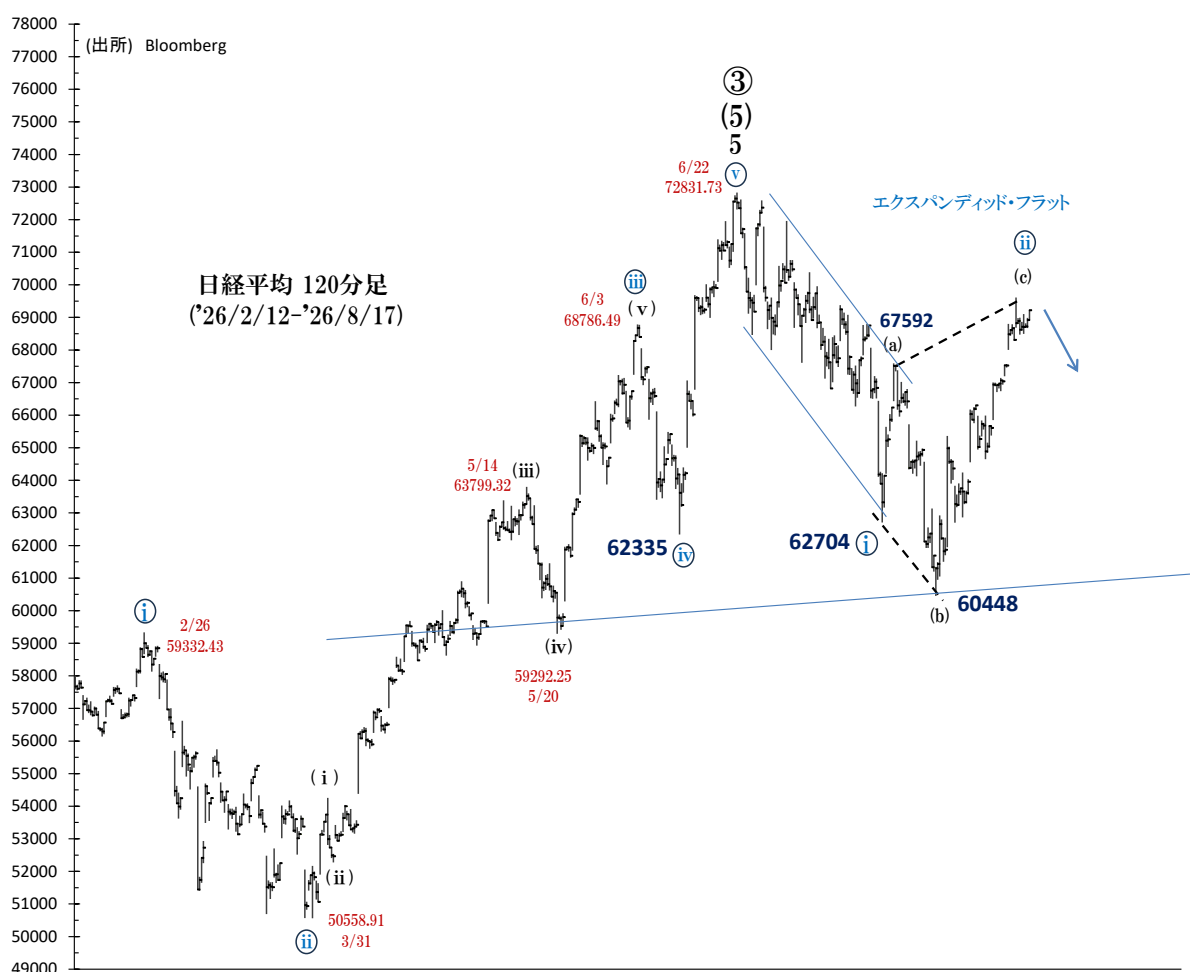
3,880(8/3 安値)からの上昇はマル v 波とカウントされます。マル v 波は 8 日続伸(8/4-8/14)と強い動きになりましたが、これはトライアングル終了後に典型的な「thrust、スラスト」です。スラストは短命な急騰劇で終わる傾向が強いことから、マル v 波はいつ終了してもおかしくありません。

前述のように、3 月末からの現行週次サイクルにおいて日経平均は高値までに 13 週かかりました。仮に TOPIX が先週(8 月第 2 週)にトップアウトしていれば、3 月安値から 21 週目(フィボナッチ)に高値を付けたことになります。

株価の先行指標である市場ボリュームをみてみましょう。プライム市場の売買代金(20 日平均)は、6 月下旬にピークを付けてから減少する一方、株高傾向となっています。これは、市場(TOPIX)が天井圏にあることを示す重要なサインです。

プライマリー④波入りが近づくなか今後の下落リスクは高い。4137(7/7 高値)を割ると、プライマリー④波入りの最初の合図になります。

プライマリー④波の調整規模は、プライマリー第②波(2018 年 1 月～20 年 3 月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになると思われます。それでも予想される日経平均の下落スケールよりは、浅めといえるかもしれません。



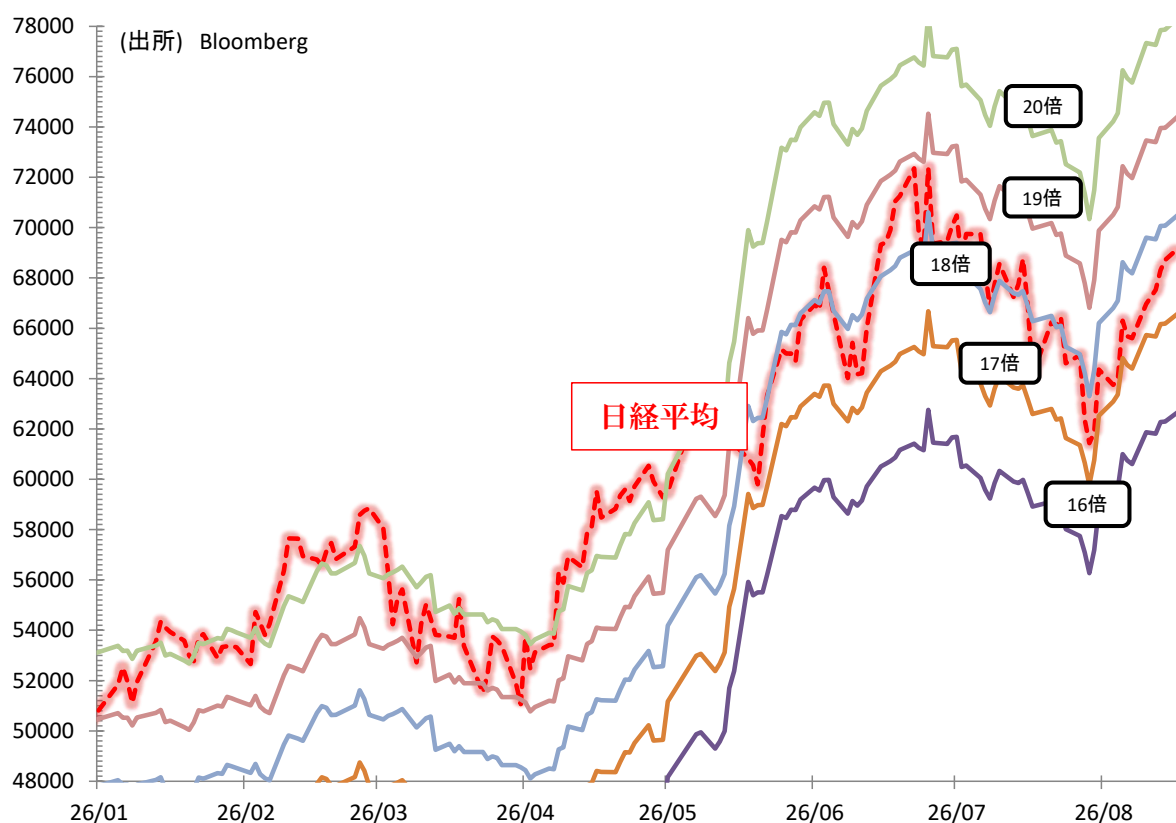
[日経平均]

62,704 円(7/17 安値)以来のマイニユート級のマル ii 波「エクスパンディッド・フラット」は、完成したか、しつつあります。

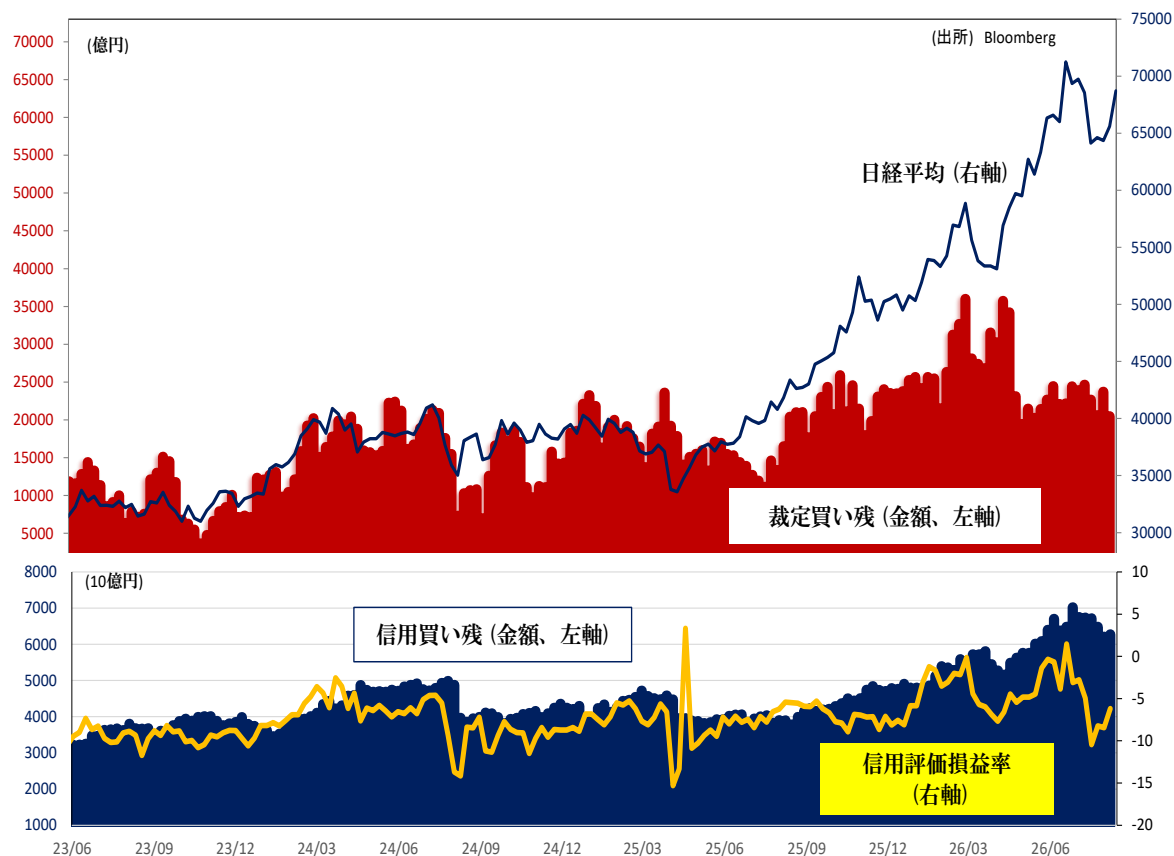
67,592 円(7/22 高値)を割ると、マル ii 波完成の最初のシグナル発動となります。現在の波動カウントが正しければ、マル iii 波の下げ波動がまもなくスタートするでしょう。マル iii 波は、60,448 円を大きく下回る強力な下げトレンドです。

[予想 PER 別の日経平均水準]

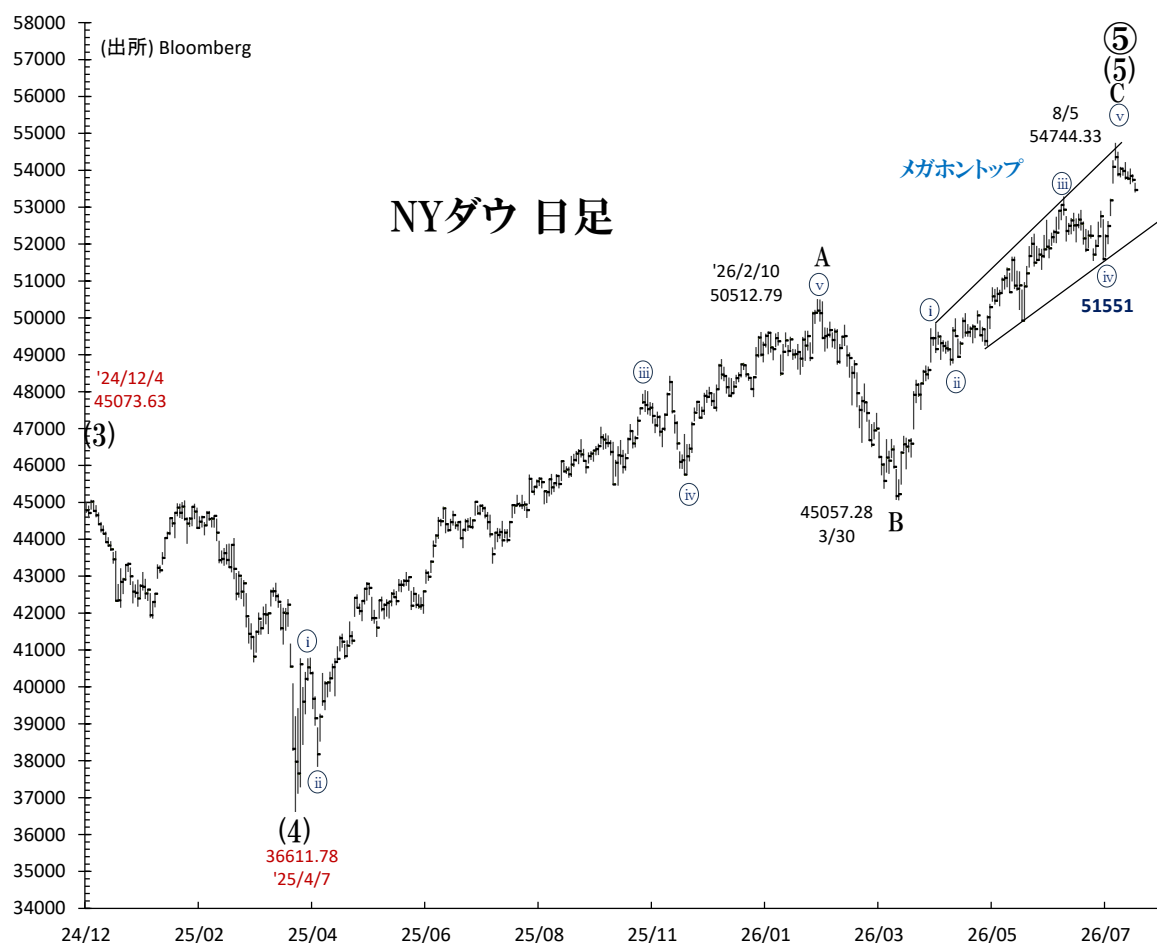
8 月 17 日の日経平均予想 PER は 17.66 倍、予想 EPS は 3919 円。過去最高の予想 EPS は 3922 円(6/25)です。



[裁定買い残と信用買い残] (8月7日時点)



NY ダウ・S&P500



【NY ダウ 30 日足 エリオット波動分析】

ダウ輸送株平均の弱含みは続いており(チャート参照)、ダウ 30 との弱気パターン「未確認」は弱気相場の接近を示唆しています。

NY ダウのチャートは 4 月下旬から 4 カ月にわたり、「メガホントップ」—ブロードニング(拡散)フォーメーションとも呼ばれます—の天井パターンを形成してきました。8 月 5 日の「流星」出現と合わせ、「メガホントップ」も完成した可能性が高いでしょう。

それは上昇パターン終了を意味しており、パターン下限ライン(今週は 52,245 ドル)を下回れば、トレンド転換が示唆されるでしょう。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

6 月から 2 カ月近くにわたる「トライアングル」は、マイナー級の第 4 波に当たります。この基本的に横ばいのパターンから上放れた波は、マイナー第 5 波に相当します。それは 25 年 4 月からの一連のマイナーウェーブにとって「最後の上昇」であり、その完成を以て S&P500 は強気相場のすべてを完成します。

ちなみに、6 月からの 2 カ月間の「トライアングル」、そしてそこからの急激な上昇「スラスト」、これら一連の流れは本邦 TOPIX に酷似していることがわかります。

S&P500 の強気相場と TOPIX の強気相場は、同時に終了するのかもしれませんが。

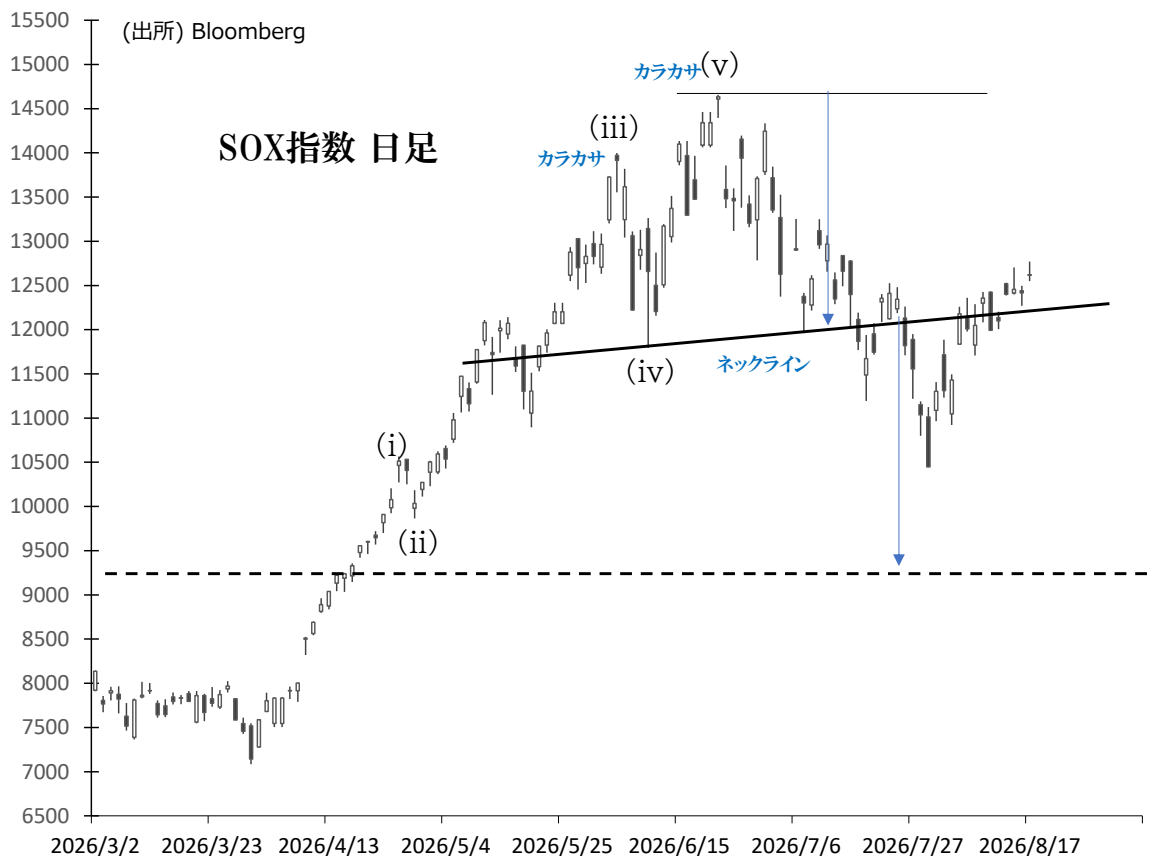
8 月 13 日の 7816 を以て、マイナー第 5 波が天井を付けた可能性に注目しています。
7,698 を割れるとピークアウトの可能性が強められます。

さらに 7,610 を割れて、8 月 3 日-4 日のマドを閉じると、調整入りの可能性が高まるでしょう。

SOX 指数

8月17日は、7月中旬以来の戻り高値を一時付けましたが、終値では押し返されました。このところ上値の重さが目立っています。

SOX 指数は下落トレンド中のリバウンドをやっているところであり、今後の下落リスクは高いといえます。ひとたび下落が再開すると、9000-9500 への下振れとなるでしょう。



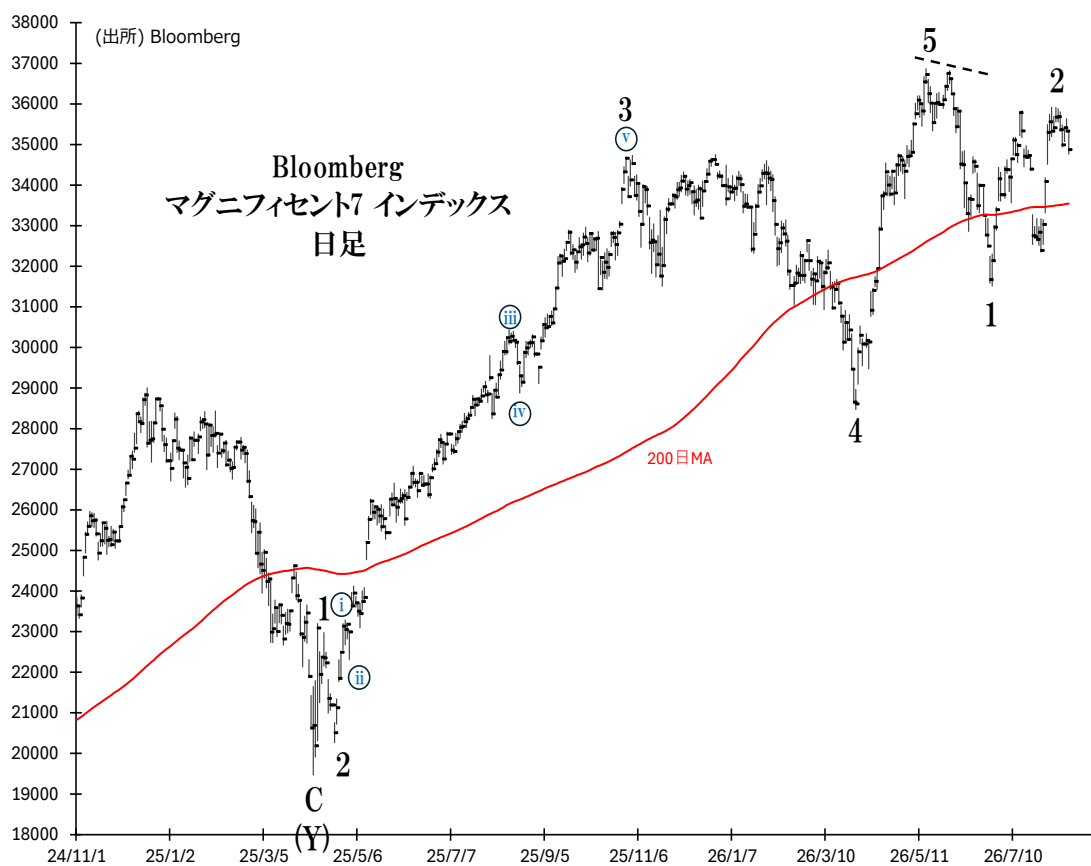
Bloomberg マグニフィセント7 インデックス

マグ7は5月14日に最高値を付け、他の主要指数より先行して高値を付けています。これは重要な天井パターン(未確認)です。

8月5日は一時2カ月ぶり高値を付けましたが、上昇を維持することはできませんでした。

6月下旬からの a-b-c パターンによるリバウンド・第2波は完成した可能性があります。

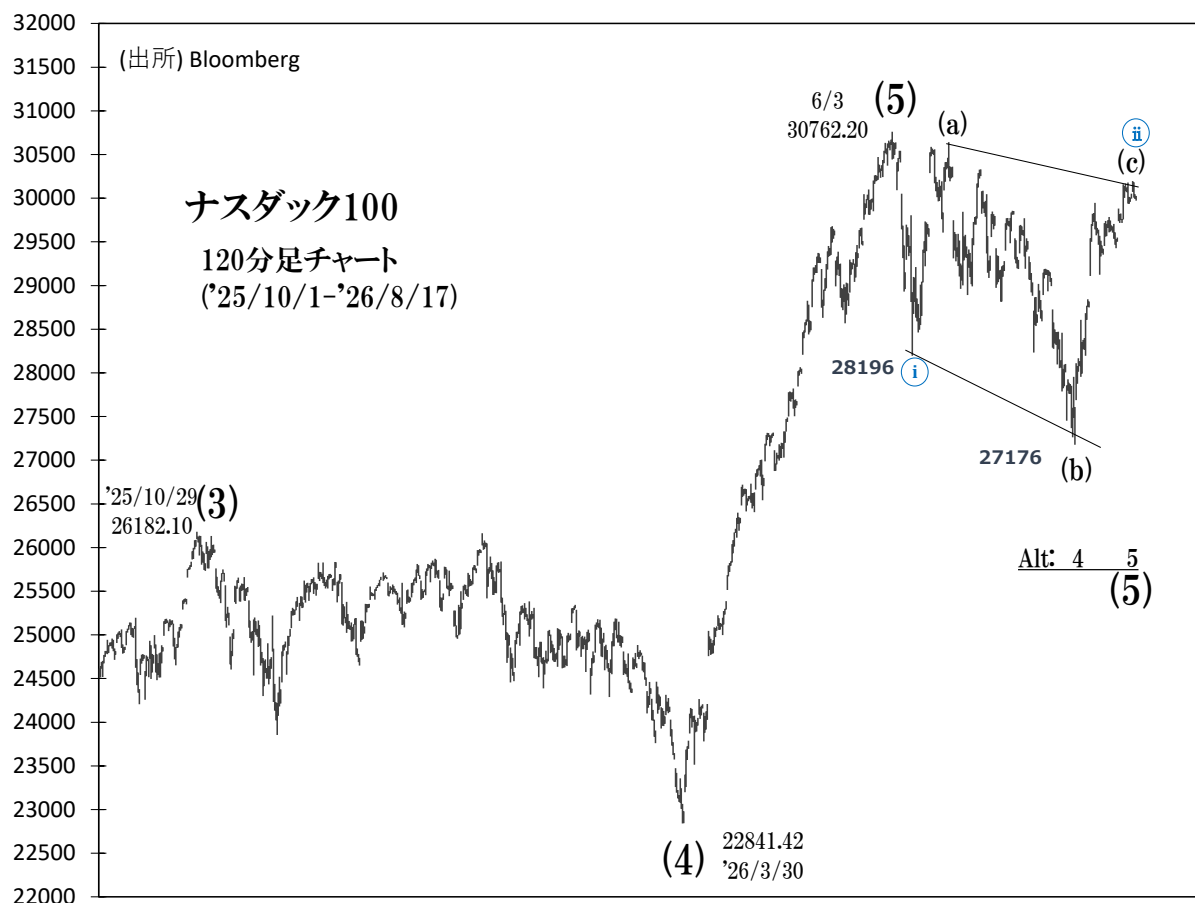
そうだとすると、第3波の強力な下げがまもなく始まることでしょう。



[ダウ輸送株平均]



ナスダック 100



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

28,196(6/9 安値)からのマル ii 波は、終わったか終わりつつあります。

マル ii 波完成後、次はマル iii 波による下落に移りますが、それは 27,176(7/30 安値)を大きく下回る、強い下降波になります。

なお今月は当初の想定以上に上昇しました。このことより、以下の代替カウントも現行カウントと同列に捉えています。

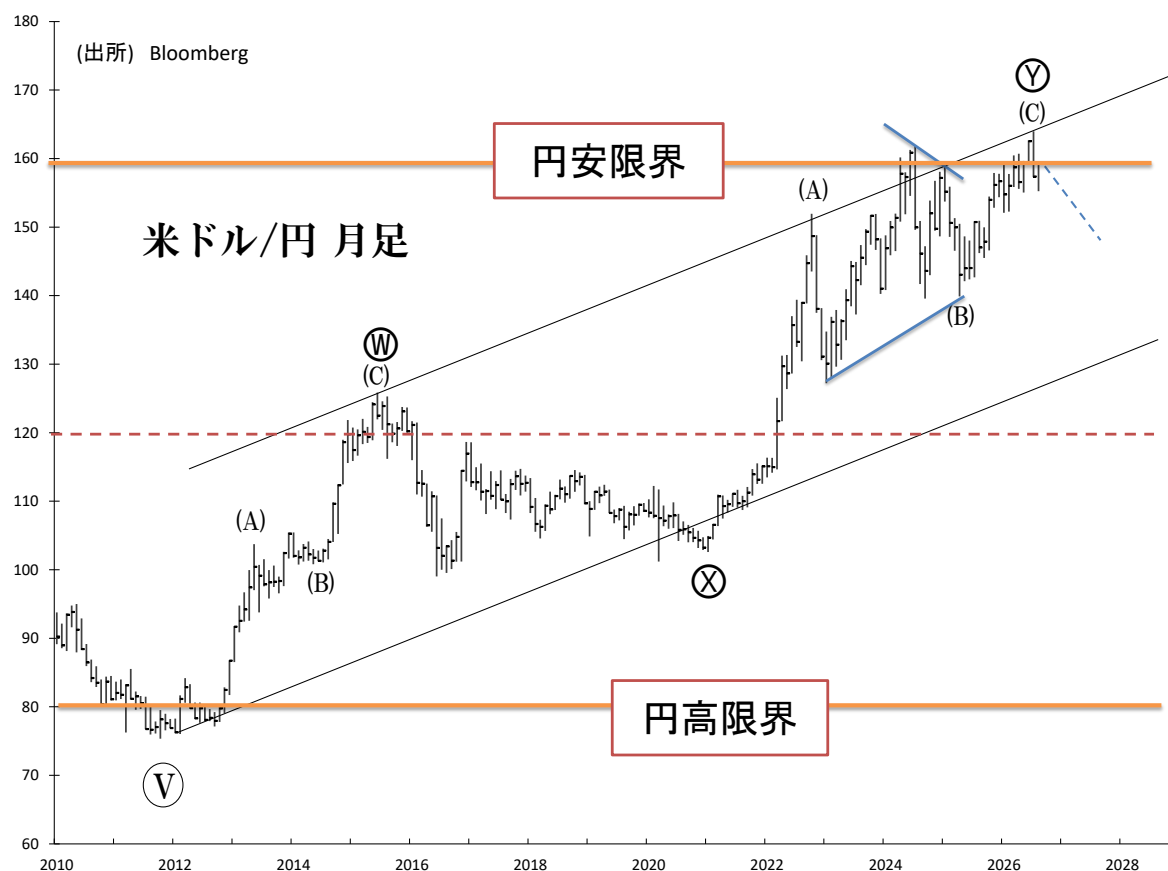
(オルタナティブカウント、Alt)

27,176 から第 5 波による上昇であり、それを以て第(5)波天井も完成します。

ナスダック 100 の第 5 波は、短縮した波(truncated-fifth-wave)になる可能性があります。

6 月から 7 月までのナスダック 100 の下げは他の主要指数に比べて大きくなりました。このような強い下落圧力が、第 5 波の上昇幅を縮めることになります。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

日米実質金利差から導かれる米ドル/円の水準は、現在1ドル=141円程度です。日本円は1年以上も、金利差からの妥当な水準より極端に過小評価された状態です。

購買力平価からの妥当な円相場は OECD 算出の GDP ベースで1ドル=97円～103円です。長期的にも日本円は著しく過小評価されています。

163.944円(7/23)を以て、通算5年間の①波[(A)-(B)-(C)]による円安はすべて完了したと思われます。この見方によると、この先は数年間にわたり円高になるでしょう。上記のように、長らく日本円はその実力に比べ過小評価されてきましたが、今後は実力に見合った適正な水準が模索されていくと思われます。

7月末実施の15年ぶり日米協調介入(円安阻止の目的では28年ぶり)は、163-165円の「ベッセント・シーリング」を築きました。

今回の介入目的は過剰な円安を阻止することであり、円高トレンドへの転換を狙ってはいないでしょうが、円安の限界点(160円台前半)が明示されたことの自然な成り行きとして、(最初は徐々に)円高志向を強めることになるでしょう。

筆者は今後数年内に、1ドル=120円-125円を付けてもおかしくない、とみています。それは歴史的なレンジ[80円-160円]の中値に相当し、かつて「黒田シーリング」と言われた水準でもあります。



【日足 エリオット波動分析】

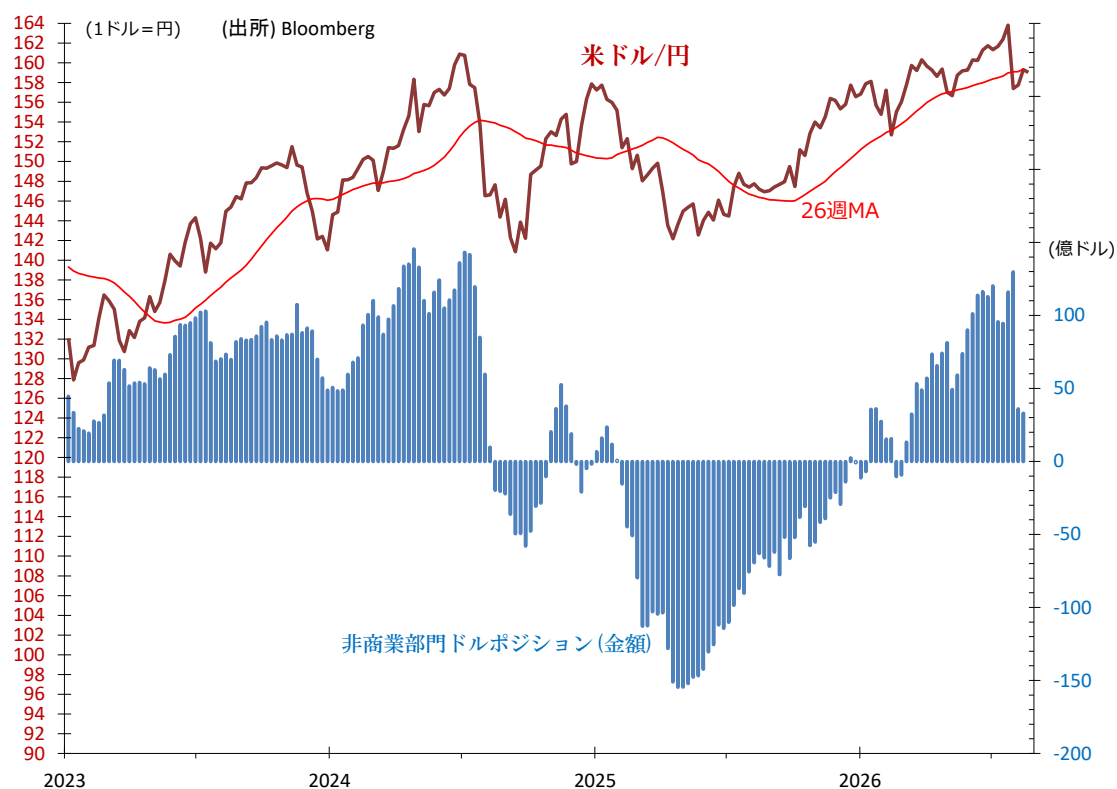
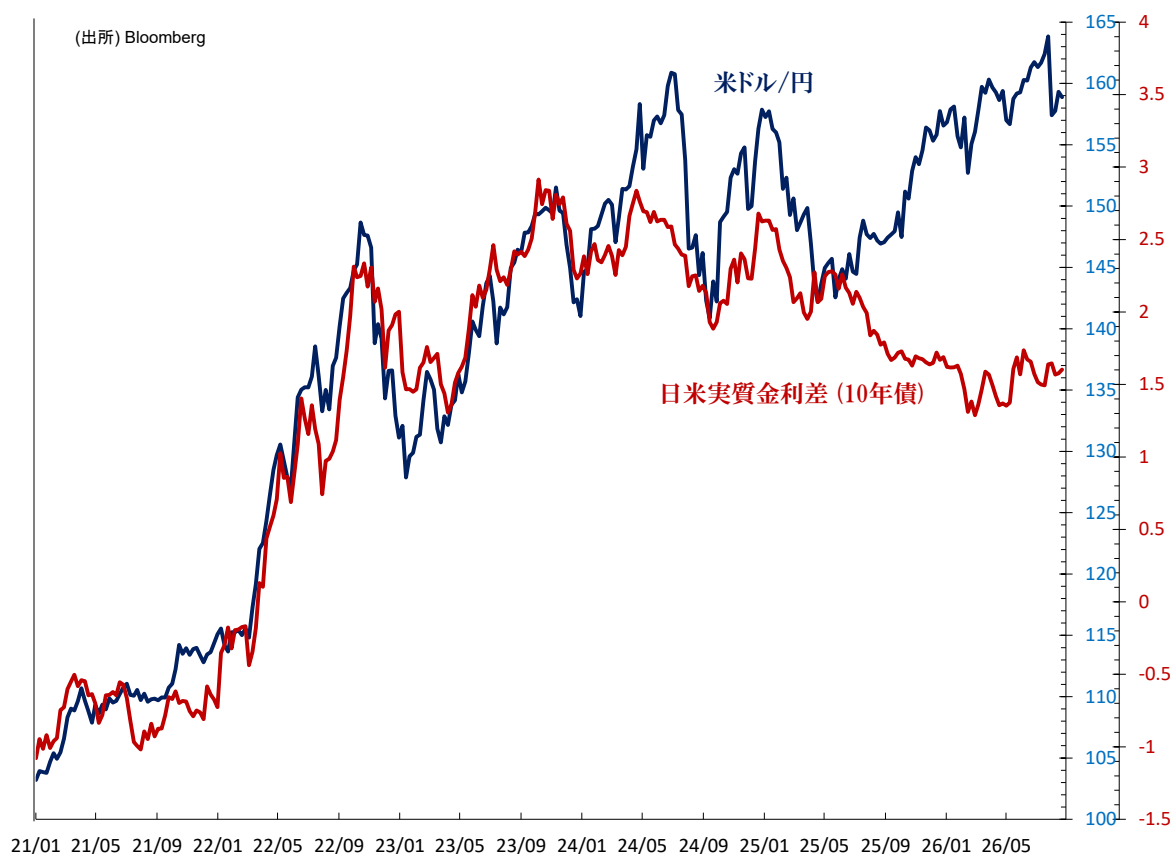
ドル/円の歴史を振り返ると、大きなトレンドが変わるときの最初のきっかけのほとんどは、為替介入それも協調介入でした(85年9月のプラザ合意など)。7月末の日米協調介入のインパクトは極めて大きいといえましょう。

163.944円(7/23)→155.156円(8/3)の円高はマイナー級の第1波であり、その後足元までの円安は第2波と読めます。それはヘッド・アンド・ショルダーズの右肩トップを作る過程でもあります。

今後 158.600円(8月3日からのサポートライン)を下回ると、円高の動きが再加速し、ネックラインの155円突破を試す局面を迎えるでしょう。ネックライン割れ以降、米ドル/円は145-146円を目指す展開になるでしょう。

金利差からのドル/円推計値

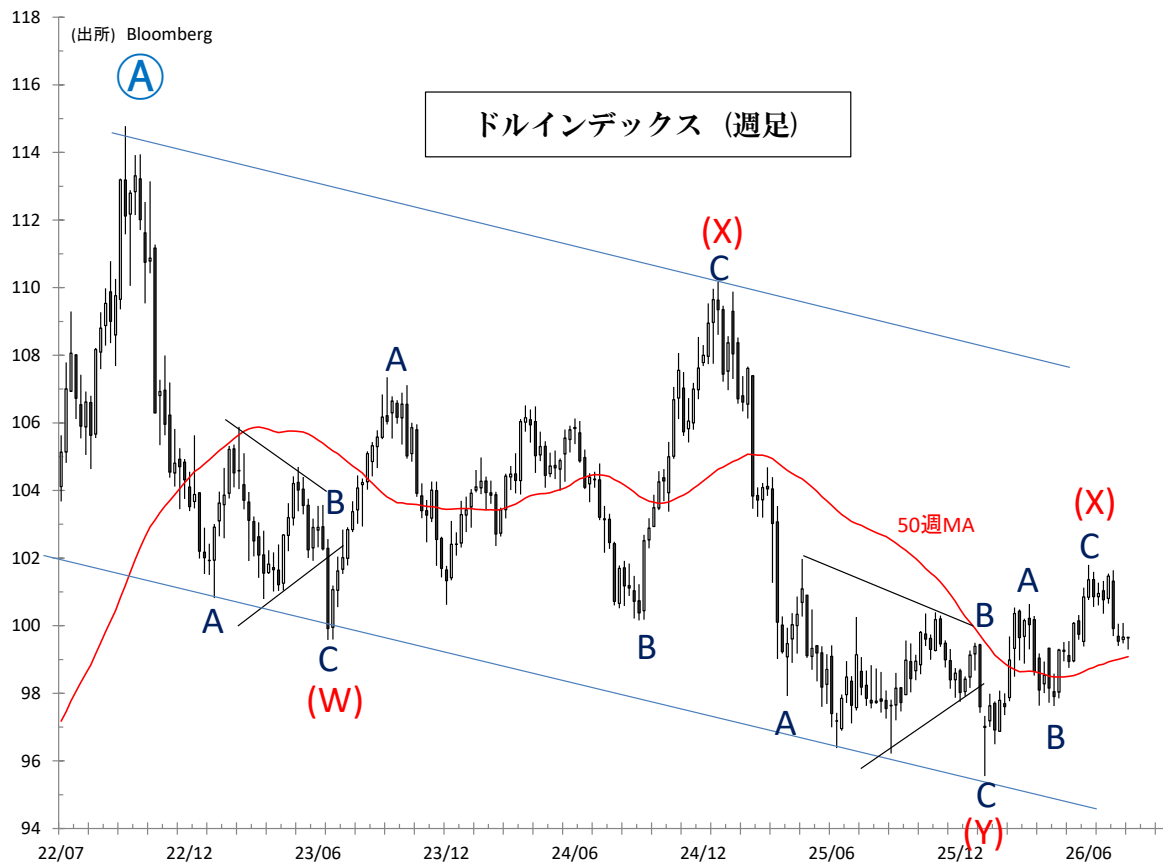
足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[141.835円]です。



円売り持ちは2週続けて減少 (2026年8月11日時点)

IMM 通貨先物市場での投机筋(非商業部門)の円売り持ち高は、前週の36.0億ドルから33.0億ドルへ減少しました。

ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

22 年 9 月高値からのドル安⑥波は、「トリプル・ジグザグ(W)-(X)-(Y)-(X)-(Z)」のコースを辿っています。長期タームの見通しは引き続きドル安です。

今年 1 月安値からの⑥波-(X)波の戻りが完成すると、3 番目のジグザグ(Z)波が展開されていく、と思われます。

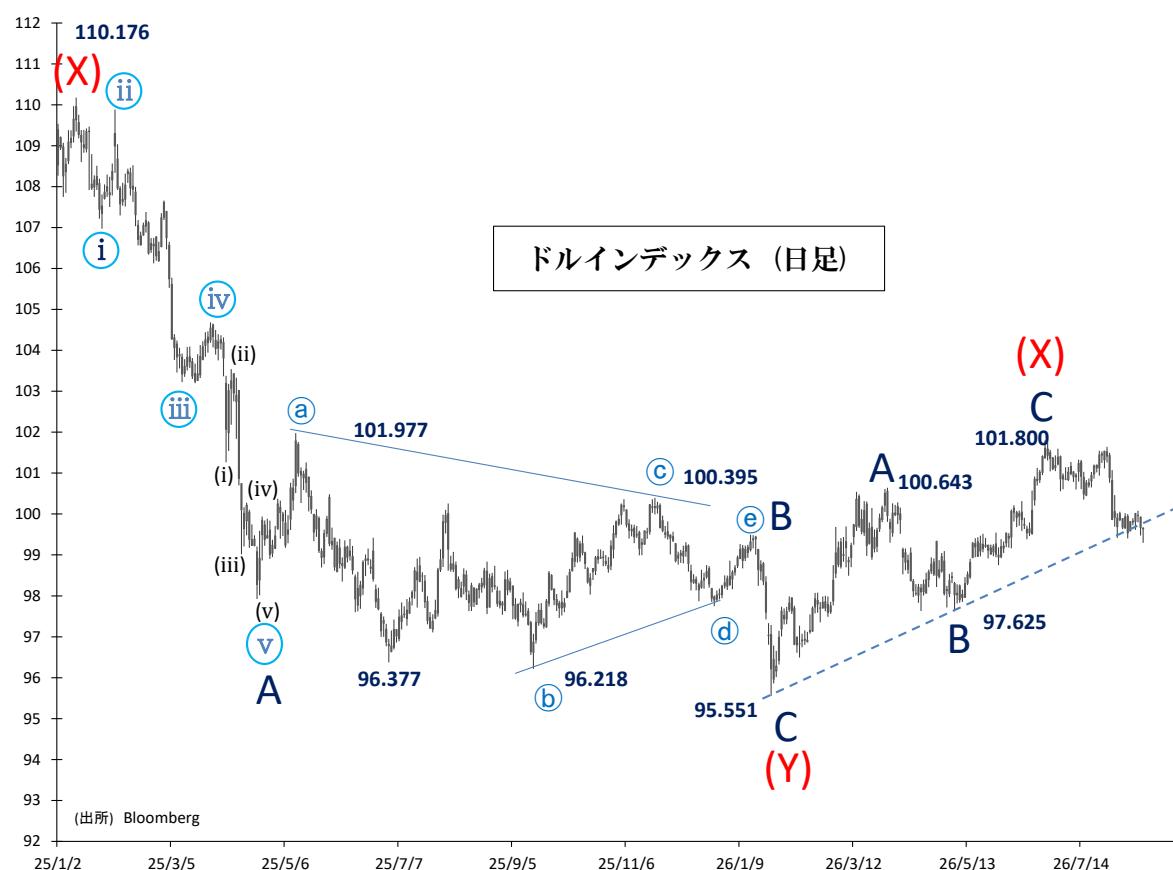
6 月 24 日の高値(101.800)は、ターゲット[101.138-102.717]内で付けました。

(X)波が終了したという見方が正しければ、この先も持続的なドル安になるでしょう。投機筋によるドル買いの極端な多さは、筆者の見方を裏付けているように思われます。

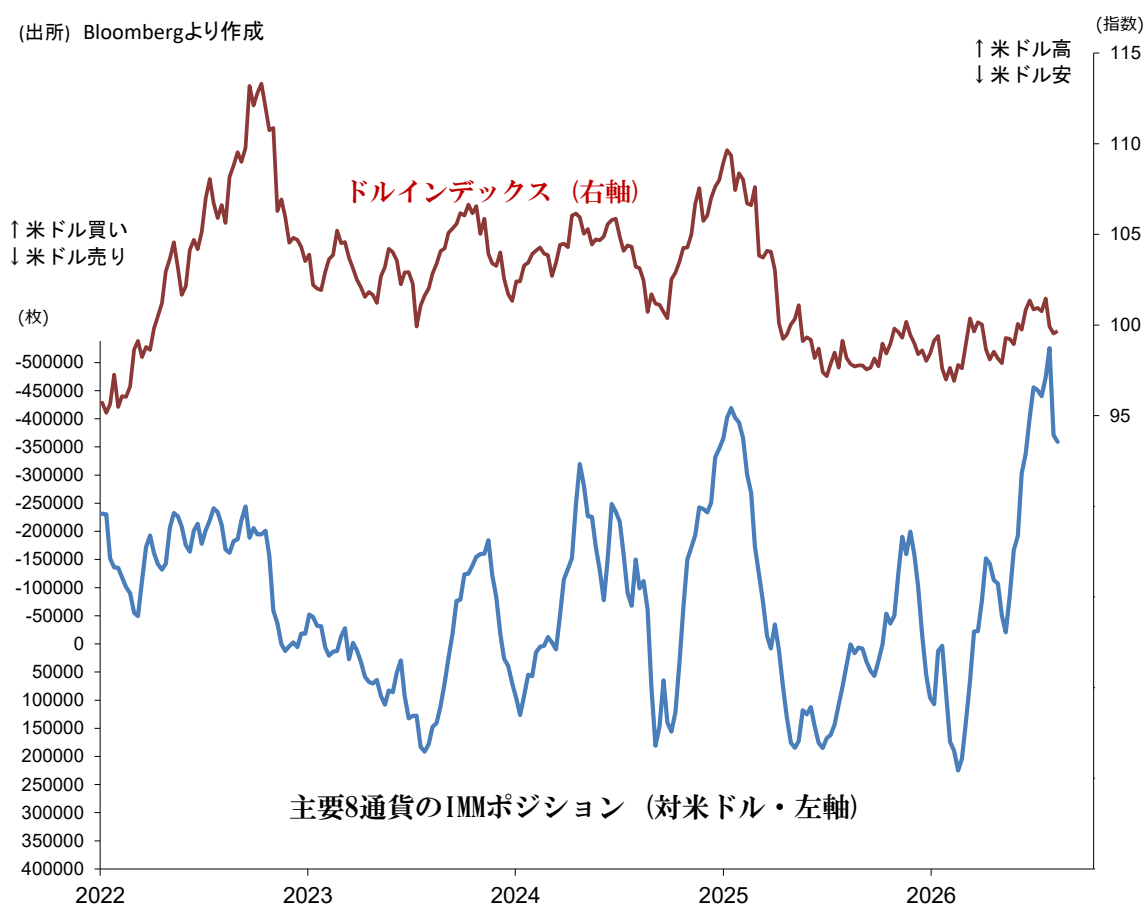
8 月 17 日には一時 6 月 5 日以来のドル安水準に沈みました。

投機筋のドル合成ポジション買い持ち高は 2 週連続で縮小

投機筋によるドル合成ポジション買い持ち枚数は、8 月 11 日時点で 35 万 9276 枚と、前週の 37 万 1145 枚から縮小しました。縮小は 2 週連続です。



(出所) Bloombergより作成



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4% 以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10% です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア